

---

# 連隊の娘

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
連隊の娘

【Nコード】  
N2565M

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
青年トニオは美しい娘マリーを助けるが何とマリーは軍で可愛がられている娘。彼は彼女を手に入れる為に連隊に入るがその途端に何と。ドニゼッティのオペラを小説にしました。喜劇です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

### 連隊の娘

### 第一幕 命の恩人

ナポレオンⅡボナパルトがまだ將軍であつた頃のこと。今スイスのチロルのある村の者達は遠くから聞こえる大砲の音に戦々恐々であつた。

「おい、まただぞ」

「あ、大砲の音がまた」

のどかな村である。麦畑がありその麦畑と家々が青や白の美しい山に覆われている。そして村には牛や羊達が多くいて村人達がその世話をしている。そののどかな筈の村の遠くから大砲の音が聞こえてきているのである。

「ひっきりなしだな」

「もうすぐここに来るのか？奴等」

「フランス軍が」

彼等はいさ話して不安げな顔になっていた。そうしてこつとも言つのであつた。

「フランス軍つていえばな」

「ならず者の集まりだ」

彼等はフランス軍をこつ思つていたのだ。確かにフランス軍はあまり行儀のいい軍隊ではなかつた。むしろこの時代の欧州では軍といえは大抵行儀の悪いものであつたが。

「そんな連中が村に来れば」

「それこそわし等は」

こんなことを話しながら不安な顔になっていた。中には神に祈っている老婆もいる。そんな中に濃い青のドレスに身を包み茶色の髪を編んで丁寧に残ろで団子にした黒い目の女がいた。

顔立ちはやや面長であり肌は白い。その肌はもうそれなりの歳だ

が綺麗なものでシミ一つない。黒い目は大きくやや垂れている。その彼女も砲声を聞きながら不安な顔になっていた。

「フランス軍が来たら私達も」

「奥様」

その彼の後ろにいる黒いタキシードに白髪と白い口髭の太った男が彼女に声をかけてきた。

「御安心下さい」

「大丈夫だというの？ホルテンシウス」

「はい」

ホルテンシウスと呼ばれた彼は彼女の問いに静かに答えた。

「私がいますので」

「そうね。執事の貴方がいるから」

「私がいる限り奥様に危害は加えさせません」

彼は強い声で述べた。

「ですから何がありましても」

「わかったわ」

彼にこう言われて幾分か落ち着きを取り戻したようであった。表情が落ち着き白い日笠を持つその手の震えも収まってきていた。

「それでは」

「ベルケンフィールド侯爵夫人ともあろう方がです」

ホルテンシウスはここでにこりと笑って彼女に告げた。

「動揺されては笑われますぞ」

「そうね。折角気ままな旅を楽しんでるのだし」

「そうです。ですから」

「落ち着くわ。それで楽しむわ」

気を取り直してこう述べたのだった。

「この旅をね」

「そうして下さると有り難いです」

「それにしても」

ここで彼女はあらためて村を見回す。確かに人々は砲声に戦々恐

々であるがのどかで実に美しい村である。

「スイスというのは噂以上にいい場所ね」

「そうですね。確かに」

ホルテンシウスも目を細めさせて彼女の言葉に答える。

「それも実に」

「ええ。それで宿は」

「はい、それですが」

ここで侯爵夫人に対して説明しようとする。しかしここで。村に若い農夫が駆け込んで来た。そうして村人達に対して大声で叫ぶのだった。

「やった、助かったぞ！」

「助かった？」

「フランス軍が帰ったのか」

「ああ、そうだ」

そうだというのである。大声でさらに告げる。

「わし等は助かったんだ。奴等が帰ったからな」

「そうか。それは何より」

「わし等は助かったのか」

「フランス軍は来ない」

このことを心より喜んでいる言葉であった。

「こないいいことがあるか」

「全くだ。兵隊が一番迷惑だ」

「暴れるし女の子にちよっかいを出す」

こうした見方は本当に何処でもであった。後に義和団事件という騒動が清で起こるがその時に日本軍が驚かれたのはそうしたこととを全くしないからだ。逆説的に言えば軍隊というものはそうしたことをする連中の集まりだと思われるのである。そうした時代だったのだ。

## 第一幕その二

「そんな連中に来てもらってたまるものか」

「そうだそうだ、来るな」

「絶対にな」

「また随分な言われようだな」

しかしここで、であった。フランス軍の青い軍服と白いズボンのやけに目立つ格好の大男がやって来た。顔は岩の如くであり顔は見事な黒い髭があり髪は後ろでリボンでくくっている。しかも耳にはピアスをしている。

「我が栄光あるフランス軍も」

「げっ、蛙だ！」

「蛙共が来たぞ！」

村人達はその大男を見て一斉に悲鳴を挙げた。蛙というのはフランス人への蔑称だ。青い軍服で蛙を食べるからこう呼ばれるようになった。これに対してフランスの宿敵イギリス人は赤い軍服を着てロブスターを食べるからザリガニと呼ばれているのである。

「逃げろ、何されるかわからんぞ！」

「娘を隠せ！逃げさせ！」

「待ってくれ」

しかし大男は厳しい声で逃げさるうとする村人達に対して告げた。

「私は怪しい者ではない」

「兵隊程怪しいというか危ない連中がいるか！」

「逃げろ！」

「だからだ。話を聞いてもらおう」

しかし彼はさらに言うのであった。

「我々はだ」

「食い物はやらんぞ」

「娘に手を出すなよ」

「そうしたことはしない。誓って言う」

こう村人達の言葉に対して告げるのだった。

「このシエルピス軍曹の名にかけて」

「へえ、あんた軍曹だったのか」

「そうだったのか」

村人達はようやく僅かだが彼の話を聞きはじめた。

「その軍曹さんがどうしてこの村に？」

「食い物も娘もいらんというのなら」

「我々は平和をもたらしに来た」

そのシエルピスはこう村人達に対して話す。

「山ではならず者達と戦っていたのだ」

「ああ、あの山の」

「山賊共か」

実は近辺のある山に山賊達が昔から巣くっているのである。彼等  
とこの村人達は非常に仲が悪かったのである。

「あの連中を退治してくれたのかい」

「だからさっきまでの砲声は」

「そうだ。山賊達は全て降した」

軍曹は言った。

「後は我々が更正させるから安心するのだ」

「わかったさ。それじゃあ」

「安心させてもらうよ」

「第二十一連隊はフランス軍の中でもとりわけ立派な軍隊だ」

シエルピスはここで胸を張って述べた。

「悪事は一切しない」

「そりゃどうも」

「そういう軍隊ならいいよ」

「さて。それではだ」

「あの、軍曹」

ここで彼のところに一人の若い娘がやって来た。見ればブロンド

に青い目のふつくらとした若い娘である。青い目の光は穏やかでかつ澄んでいる。青いフランス軍の軍服とふわりとしているが如何にも動きやすそうな白いスカートを着ている。その彼女が彼のところに来たのである。

「ここにいたのね」

「おお、マリー」

シエルピスはその若い娘の姿を認めて顔を崩して笑顔になった。岩の如き顔が彼女を見ただけで瞬く間に優しい笑顔になってしまった。

「来てくれたのか」

「皆ももうすぐ来るわ」

「それは何よりだ」

「あれ、その娘さんは」

「誰なんだい？」

「またえらく別嬪さんだね」

村人達は彼女の姿を認めて言ってきた。

「あんたの妹さんかい？」

「それとも娘さんかい？」

「強いて言うなら娘だな」

シエルピスはその優しい笑顔のままで村人達の問いに答えた。

「この娘はね」

「強いてって」

「また変わったことを言う」

村人達には今の彼の言葉の意味がわかりかねた。それで首を捻るのだった。シエルピスはその彼等に対してこう話すのであった。

「この娘は戦場で拾った娘なんだよ」

「戦場でかい」

「じゃあ孤児だったのかい」

「私は赤ちゃんの時にこの連隊に拾われたんですよ」

そのマリーがにこりと微笑んで皆に話す。話す笑顔がまるで太陽



の様に明るい。

### 第一幕その三

「それで育ててもらったんです」

「両親が誰なのかはわかっている」

シエルピスはこのことはわかっていると話す。

「しかし今では」

「連隊の皆が私のお父さんでありお兄さんです」

「おやおや、また随分とお父さんにお兄さんが多いな」

「何千人じゃないかい」

村人達は彼女の言葉を聞いて一斉に言った。

「それだけいるのかい」

「じゃあちつとも寂しくないじゃないか」

「私のいる酒保はいつも人が来てくれて」

マリーはそのこともにこにことして村人達に対して話すのであった。

「朝から晩までいつも周りに皆がいてくれるの」

「そりゃいいねえ」

「この軍曹さんの顔はやけに怖いけれど」

「顔のことは言わないでもらいたい」

シエルピスはこのことを言われるといささか不機嫌な声になった。表情はあまりにも厳しい顔なのでよくわかりはしない。

「決して」

「あら、気のいい兵隊さんなのね」

「その様ですな」

侯爵夫人もホルテンシウスもここで安全とわかりこれまで遠くにしたのを近くに寄ってそれでシエルピスとマリーを見はじめる。

「何かと思っただけれど」

「若い娘さんもいるし」

「大丈夫のようですな」

こんな話をしながら村人達の中に入ってそのうえで様子を窺い  
したのであった。

シェルピスとマリーは陽気に話している。ここでシェルピスはふ  
とマリーに対して尋ねるのだった。

「ところでマリー」

「どうしたの？」

「最近兵達を避けて誰かと会っていないかい？」

「こう彼女に尋ねるのだった。

「このチロルに来てから」

「ええ、そのことだけれど」

それを問われたマリーはすぐに答えてきた。

「実はね」

「うん、実は」

ここで話すマリーだった。その会っている者とは。

「チロルの人なの」

「このチロルの」

「ええ。それで私の命の恩人なのよ」

「命の恩人！？」

彼女の言葉を聞いて思わず少し大きな声を出してしまったシェル  
ピスだった。そう言われても彼にはぴんと来ないものだったからで  
ある。

「マリーの命の恩人だけれど」

「おお軍曹」

「それにマリーもここにいたのか」

しかしここでその兵隊達が来た。誰もがその手に銃を持ち黒い帽  
子に青い上着、それと白いズボンという格好である。誰もが髭を生  
やし髪を後ろで束ねている。フランス軍の格好そのままである。

「丁度よかった」

「不埒者を捕らえました」

「不埒者！？」

それを聞いてすぐに眉を動かすシエルピスだった。

「そんな奴がいたのか」

「オーストリアかプロイセンのスパイか」

「はたまたイギリスの回し者か」

どちらにしろフランスの敵である国々だ。

「そうした輩かと」

「怪しいことこの上ありません」

「チロルにオーストリアやプロイセンの者がいる」

シエルピスはそれを聞いてまずは首を傾げさせた。

「そんなことがあるのか」

「わかりませんよ」

「スパイは何処にでもありますから」

兵達はどうそのシエルピスに対して返す。

「ですから」

「念の為に捕まえました」

「そのスパイとやらは何処にいるのだ？」

シエルピスはこのことも彼等に尋ねた。

「それで一体」

「はい、ここです」

「ここにいます」

すると村人の服を着た若者が連れられて来た。茶色の髪を丹念に後ろに撫で付けており彫のある整った顔をしている。目もはつきりとして窪んでいる。チロルというよりはパリやウィーンにいるような、そうした何処か気品さえ感じさせる若者が連れられて来た。

## 第一幕その四

「放して下さい」

若者は縛られながらも必死に懇願していた。

「僕は何も」

「では何故我が連隊の周りをうろつろしていた？」

「何かを探るようにして」

「あの人は」

マリーはその若者を見てあつと驚いた顔になった。一瞬のうちに。

「まさか。こんなことに」

「言え、何故だ」

「何故我が隊の周りをうろつろしていた」

兵達は彼を囲んで問い詰める。彼はその彼等の剣幕にいささかたじろぎながらもそれでもこう返すのであった。

「それはですね」

「うむ、どうしてだ」

「ことと次第によつては命はないぞ」

「連隊にいる娘さんに会いに来たのです」

こう兵達に答えるのであった。

「だからです」

「娘!？」

「娘というたまさか」

「ええ、そうよ」

ここでマリーが言った。すぐに若者の前に立ち彼を護る様にして兵達に言う。

「この人はトニオというの」

「トニオ!？」

「このスパイの名前か」

「トニオはスパイじゃないわ」

マリーは兵の一人の何気ない言葉にきつとした顔になって返した。

「この人は絶対にね」

「ふむ。マリーが言うのならな」

「そうなのだろうな」

「そうだな」

彼等はマリーの言う言葉にはすぐに頷いた。彼女のことを絶対に信頼していることがここからわかった。髭だらけの怖い顔ばかりではあったがそれでもだった。

「しかし何故」

「マリーに会いにきたのだ？」

しかしまだ疑問はあった。兵達は今度はこのことをトニオに対して問うのだった。

「マリーと知り合いの様だが」

「何故知り合ったのか」

「ある夜のことよ」

マリーがそのこと兵達に説明するのだった。

「私がお酒を飲んで涼みに外に出た時だけね」

「何っ、それはまずいぞ」

「そうだ。スイスはフランスとは違うんだ」

兵達はマリーの今の言葉を聞いて一斉に声をあげた。

「何処に断崖絶壁があるのかわからないのに」

「落ちたらたじゃ済まないぞ」

「ええ。その通りよ」

マリーはここで顔を曇らせた。

「もう少しで落ちるところだったわ。絶壁にね」

「それ見たことか」

「スイスは危ないんだ、あちこちにそういうものがあるんだからな」  
所謂クレバスである。スイス名物の一つでもある。あまりいい名物ではないがそれでも名物なのは紛れもない事実である。実際に存在しているのだから。

「全く。それでどうして助かったんだ」

「この若者が助けてくれたのかい？」

「そうよ」

その通りだと答えるマリーだった。

「私が今にも絶壁に落ちそうになって木の枝に必死に捕まっていたけれど」

その絶壁のところに生えているその木の枝にということである。

「たまたまトニオが通り掛って私を引っ張り出してくれたのよ」

「何と、その絶壁から」

「マリーを救い出してくれたのか」

「自分も落ちるかも知れないのに」

そうしたというのである。絶壁で人を助けるからには自分も落ちるかも知れない。しかし彼はそれでもマリーを救おうとしたのである。

「そうしてくれたのよ」

「そうだったのか」

「マリーを助けてくれたのか」

「それなら」

兵達はマリーの話を聞き終えてまずは。トニオの縄を解きそのうえで暖かい声をかけるのであった。

「御前は仲間だ」

「俺達の仲間だ」

「マリーを助けてくれたんだからな」

「そうですか」

つい今さっきまでえらい剣幕で囲まれていたので今の態度に驚きを隠せないトニオだった。

## 第一幕その五

「僕がですか」

「そうよ」

今度はマリーが優しく彼に告げる。

「貴方は私達の仲間よ」

「マリーの仲間」

彼女に言われると明るい顔になるトニオだった。

「そうなんだ、僕は」

「そうよ。それでね」

「乾杯だ」

マリーに続いてシエルピスが言ってきた。

「皆ワインはあるか」

「ええ、ここに」

「ありますよ」

兵達が笑顔でワインの瓶を次々と出して来た。

「山賊達を成敗した祝いで持って来ていたんですよ」

「皆で飲もうと思って」

「そうか。それは好都合だ」

彼等の言葉を聞いて満足した笑みになるシエルピスだった。やはりここでも実にいい笑顔である。

「それならだ」

「飲みますか」

「連隊の歌を歌いながら」

「うむ、では歌おう」

「我等フランス軍の中でも」

早速乾杯しながら歌いだす彼等であった。その中で村人達にも杯を手渡していく。

「さあどうぞ」



「一杯やりましょう」

「あつ、こりやどうも」

「御親切に」

「ですから」

ここでまた村人達に言うシエルピスだった。

「我々は戦争をしに来たのではないのですから」

「平和をもたらしにですね」

「そして山賊を」

「そういうことです」

このことは確かに言うのであった。

「ですから御安心下さい」

「ええ、それじゃあ」

「そういうことで」

村人達と兵士達は仲良くそのワインを飲みはじめた。暫く談笑していたがやがて遠くからまた大砲の音が聞こえてきた。村人達はそれを聞いてシエルピスに問う。

「あの砲声は」

「まだ山賊がいるのですか？」

「いえ、あれは点呼の合図です」

彼はそれだと答えた。

「それなのですよ」

「点呼のですか」

「それなのです」

「はい。ですから一旦戻ります」

彼はすぐに兵士達に顔を向けた。そうして重厚な声で告げるのだ。  
つた。

「では一旦戻るぞ」

「はい、それでは」

「一旦戻りましょう」

「それではまた」

兵士達は村人達に一先ず別れの挨拶を告げてその場を後にした。  
その時ト二才も連れて行こうとした。

「御前も来てみるか？」

「一回覗いてみたらどうだうちの連隊を」

「えっ、僕もですか」

話を振られた彼はまずは目をしばたかせた。

「僕もつていいますと」

「マリーが好きなんだろう？」

「じゃあマリーのいる場所を見てみたらどうだ」

「悪い場所じゃないからな」

彼等は笑ってト二才に告げてきた。

「だからな」

「ちよつと来て見るんだな」

「はあ」

ト二才は彼等に言われるままだった。しかしここでシェルピスが  
言うのだった。

「まだいいだろう」

「いいんですか」

「別に」

「兵隊でもない人を連れて行くのもどうかと思うしな」

こつも言うのだった。

「だからな。止めておこつ」

「そうですか。それじゃあ」

「そういうことで」

「じゃあな」

彼の言葉を受けて一旦ト二才を解放する彼等であった。

## 第一幕その六

「またな」

「後でな」

「ええ、じゃあ」

ト二オはとりあえず解放されて兵士達はシエルピスに連れられて一旦その場を後にする。村人達も彼等が去るとそれぞれ背伸びをしたり首を回して鳴らしてから言うのであった。

「じゃあまた兵隊さんが戻って来るまでは」

「仕事するか」

「そうしましょう」

こう話してそのうえでそれぞれの持ち場に戻る。後に残ったのはマリーとト二オ、それに侯爵夫人とホルテンシウスだった。ここで夫人はホルテンシウスに対して言うのだった。

「ねえ」

「どうされましたか？」

「あの娘だけれど」

彼女はマリーを見て言うのだった。

「何処かで見たと思うけれど」

「そうなのですか」

「もつと見てみたいわ」

そしてこんなことも言った。

「もつとね」

「どなたかに似ておられるとか」

「そんな気がするのよ」

首を傾げながらまた述べた。

「だからね。あそこにも隠れて」

「はい」

側の民家の物陰を指差してホルテンシウスに告げる。

「それで見てください」

「わかりました。それじゃあ」

こうして二人は物陰に隠れて彼女を見ることにした。マリーとトニオはそんな彼等のことを知らず今はそれぞれにこにことして見詰め合っているのがあった。

まず口を開いたのは。トニオであった。

「ねえ」

「どうしたの？」

「マリーっていったよね」

「そして貴方はトニオね」

そのにこにことした顔でトニオを見上げての言葉であった。

「名前はもう覚えてたわ」

「僕もだよ。ねえマリー」

トニオはマリーの顔を見詰めながら彼女の名前を呼んでみたのであった。

「よかったらだけれど」

「どうしたの？」

「一緒にいていいかな」

こう彼女に言うのだった。

「一緒に。これからね」

「私となのね」

「勿論だよ。二人だから言うけれど」

少しでも勇気を出して。それから言葉として出したのであった。

「好きだから」

「わかってたわ」

マリーはにこりとして彼の今の言葉に応えた。

「さつき皆が囃し立てていたし」

「あの兵隊さん達がだね」

「いい人達よ」

このことも言うマリーだった。

「皆ね」

「そうだね。最初は怖かったけれど」

問い詰められた時のことを苦笑いと共に思い出しての今の言葉である。

「今はわかるよ」

「そうでしょ。それでね」

「うん。どうしたの？」

「私もなの」

今度は彼女からの言葉であつた。

「私も。ト二才のことが好きよ」

「えっ、そうなの」

「私が好きだからずっと連隊の周りにいたのよね」

「うん。まあ僕はね」

ここで自分のことも話すト二才だつた。

「羊飼いの家の次男でね」

「羊飼いな」

「多いんだよ、また家の羊が」

「ここでも苦笑いになっていた。」

「何百といてね。その世話がね」

「羊がそんなにいるなんて」

「だから生活には困ってないよ。兄さん夫婦も元気でやってるし父さんや母さんもいるしね」

家族のこと話すのであつた。

## 第一幕その七

「大きな家だしね」

「そうだったの。暮らしはいいの」

「そうなんだ。けれど」

「ここまで話したうえでまた言うトニオだった。」

「恋人は今までいなくて」

「私じゃ駄目かしら」

今のトニオの言葉にすぐに入った形であつた。

「私じゃ。どうかしら」

「それはもう」

返事は決まっていた。彼にとっては。

「喜んで」

「私もよ」

返事が決まっていたのは彼だけではなかった。彼女もであつた。

二人は笑顔のままで見詰め合い続けている。

「喜んでね」

「そうだね。二人ずっと一緒にいようよ」

「じゃあ連隊に入るの？」

「家族には伝えてね」

それからだというのだった。

「入るよ、君と一緒にいられるのなら」

「ええ。だったら」

「君とずっと一緒に」

「貴方とずっと一緒に」

ここで二人は抱き合った。

「こうしてね」

「何時までも一緒にね」

侯爵夫人達が見ていることには気付いていない。しかし別の人間

が来たことには気付いたのだった。

「あつ、いけないわ」

「どうしたんだい？」

「軍曹が来られたわ」

最初に気付いたのはマリーだった。シェルピスの姿を見たのである。

「離れましょう、今はね」

「うん、じゃあ」

二人は何もなかったように離れた。夫人達はそんな二人を今まで見ていたがここでホルテンシウスが主に対して言うのであった。

「それで奥様」

「どうしたの？」

「このフランス軍ですが」

「ええ」

「確か妹様の御主人がおられましたな」

「ええ、そうよ」

物陰から出ながら彼の言葉に頷く。

「それは貴方もよく知ってるじゃない」

「それはその通りです」

彼もまた頷きながら物陰から出る。そうしながら話を続けていく。

「あの娘も何所かで会ったのではと仰っていますし」

「そのこととつながりがあるとでも？」

「まあそんなことはまずないことですが」

このことは頭ではわかっていていることであつた。

「それでもですね」

「まさか。あの娘は死んだ筈よ」

しかし夫人はここでこう言うのだった。

「だってあの人も妹もあの戦いで」

「そうですか」

「その時にあの娘も」

「御遺体は見つかっていませんが」

「赤ちゃんの亡き骸なんて小さいから何処にでも消えるわ」

夫人は希望を打ち消すようにして返した。

「そんなのは」

「それはそうですが」

「あまり過剰な希望を持つても不幸になるだけよ」

夫人は寂しい顔でホルテンシウスに告げた。

「そんなことをしてもね」

「左様ですか」

「けれど」

ここまで話したうえで話を変えてきた夫人であった。

「旅はもうね」

「止めておくべきですか」

「フランス軍も来ているし何だかキナ臭いわ」

「このフランス軍は別に戦争をしているわけではないようですがな」

「けれどよ」

それはわかってもまだ言うマリーだった。



## 第一幕その八

「絶対に何かあるわよ。フランス軍がここまで来るといふことは」「やはり戦争ですか」

「そうだと思つわ。だから巻き込まれないように帰りましょう」

「左様ですね。それでは」

「残念だけれど」

右手の日笠を寂しそつに見ての言葉であつた。

「それではですね」

「帰りましょう」

「いえいえ、その前にです」

何気なく言つた主をここで止めたホルテンシウスであつた。

「確かにお嬢様は見つかりませんでした」

「ええ」

「それでもです。奥様に何かあつてはいけません」

「戦争に巻き込まれてはなのね」

「ついでに私もです」

自分のことを言つのも忘れないホルテンシウスであつた。

「だからです。ここはです」

「どうするつもりなの？」

「丁度あちらに軍曹殿がおられます」

「相変わらず怖い顔ね」

そのシエルピスを見ながら話す二人だつた。

「とてもね」

「ですがあの方を頼りましょう」

彼の提案はこうしたものだつた。

「是非共」

「是非共、なのね」

「はい」

また主に告げるホルテンシウスであつた。

「如何でしょうか、それで」

「そうね」

彼の言葉を聞いてまずは考える顔になる夫人だつた。

「それじゃあそうしましょう」

「それでは。あのですね」

彼は夫人の言葉を受け早速シエルピスに声をかけるのであつた。

「あの、軍曹さん」

「何でしょうか」

「御願ひがあるのですが」

こう言つてから申し出るのであつた。

「私達はこれから帰りたいのですが」

「それで我々に護衛を頼みたいというのですね」

「駄目でしょうか」

「いえ、構いません」

シエルピスは微笑んで快くその申し出を受けるのだった。

「無論隊長から許可は必要ですが今我が連隊は前線にはいませんので」

「それで宜しいのですね」

「はい。それでですが」

ここで彼は言うのであつた。

「どちらまで帰りたいのですか」

「ベルケンフィールドまでです」

夫人が彼に告げた。

「そこまでです」

「ベルケンフィールドとは」

その城の名前を聞いて眉を動かしたシエルピスであつた。そしてこう言うのであつた。その間にトニオとマリーは兵達のところに向かつていて今はいない。

「懐かしい名前ですな」

「懐かしいとは？」

「いえ、実はですね」

ここで話をはじめるとシェルピスだった。

「私が入隊した頃部隊にロベール・ベルケンフィールド大尉という方がおられました」

「ベルケンフィールドですか」

「そうです。その方がです」

「あの人がおられたのね」

それを聞いてこっそりと呟く夫人だった。

「何という奇遇」

「その方のことを思い出しました」

「そうですか。実はですね」

軍曹の話を聞いてからここで言う夫人であった。

「大尉と私……いえ妹にですけれど」

「はい」

「二人の間に女に子がいました。大尉は戦死されましたが」

「ええ。残念なことに」

「実はその前に私に娘を託してくれたのです」

こう軍曹に話す。

「その娘は我が家の家名と財産の相続人ですけれど」

「大尉の娘さんでしたら」

「もう死んでますよね。召使い……いえ妹に預けてそのま  
ま夫に会いに前線に出てそこで巻き込まれて」

「生きていますよ」

しかし軍曹は言うのであった。

## 第一幕その九

「その娘でしたら」

「えっ!？」

「えっ、でなくです」

大いに驚いて目を見開いた夫人に対してまた言ってきた。

「その通りですが」

「生きているのですか。娘が」

「ああ、丁度いいところに」

こう言うとだった。そこにマリーが来たのであった。

「この娘がそうですが」

「ではこの娘が」

「間違いありません」

ホルテンシウスは主の問いに対して答えた。

「この娘さんが奥様の娘……いえ」

「そうよ」

「姪御様です」

何故かこう言い換えるのであった。

「間違いありません」

「何という奇跡」

夫人は最早天にも昇る有様であった。

「こんなことが起こるなんて」

「マリー、いいところに来たな」

「どうかしたの？」

「御前の家族が見つかったのだよ」

にこりと笑ってマリーに告げるのだった。

「御前のね」

「私の?何言ってるのよ」

こう言われてもからかわれてると思って笑うマリーだった。そし

てそのシエルピスに対して言うのであった。

「軍曹も冗談を言うのね」

「いや、これが冗談ではなくてだな」

「私の家族はこの連隊じゃない」

マリーにしてみればまさにそうであった。だからこそその今の言葉であつた。

「それで何でそんなことを言うのかしら」

「冗談ではありませんよ」

その彼女に対して夫人は何とか姿勢を保って告げた。

「マリー」ブレスフィールドですね」

「何で私の名前を知ってるのかしら」

マリーは夫人を見てまず是这样思った。

「そういえば貴女村の人達の中にいたけれど」

「私は貴女の母」

「お母さん!？」

「いえ、伯母です」

咄嗟に言い繕う夫人であつた。

「貴女は私の妹の娘だったのです」

「嘘よ。まさかそんなことが」

「いや、間違いないことだ」

信じようとしないう彼女に対してシエルピスが告げた。

「私もまだ信じられないのだがな」

「嘘、そんなことが」

「遂に見つかったのね」

夫人は今も天にも昇る様子であつた。

「娘が……いえ姪が」

「ようございましたな、奥様」

「全くよ。ではマリー」

「はい？」

「貴女を引き取らせてもらいます」

こう彼女に申し出てきたのであった。

「それで宜しいですね」

「私を？何故？」

「我がブレスフィールドの家名と財産の相続人だからです」

マリー本人にもこのことを告げるであった。

「それに何より」

「何より？」

「貴女は私の姪なのですから」

今度はすぐに言えた。

「だからです」

「いいえ、それはできないわ」

しかしマリーは彼女の言葉を聞こうとはしなかった。

「私はこの連隊の娘よ。貴族の生活なんて柄じゃないわよ」

「柄とかそういう問題じゃないのよ」

「左様です」

拒もうとする彼女に対して言う夫人とホルテンシウスだった。

「貴女に戻ってもらわないと」

「私もです」

「だから私は」

マリーは聞こうとしない。あからさまに嫌そうな顔になってその  
うで言うのであった。

## 第一幕その十

「そんな柄にもないことは」

「いや、マリー」

しかしその彼女にシエルピスも言ってきた。

「やはりだな。親戚のところにいる方がいい」

「軍曹までそんなことを」

「御前は女の子だ。やはり軍にいるのはどうかとも思う」

このことは今まで隠していた考えであった。

「だから。もうな」

「この人のところに」

「家名も財産も手に入るのだぞ」

「そんなことには興味がなければ」

あくまでそうしたことには何の関心も見せないマリーだった。

「だから別に」

「まあそう言わないでだ」

シエルピスは優しい声でそんな彼女を説得する。

「親戚の人と共に暮らすことだ」

「そうよ。是非ね」

「御一緒に」

夫人だけでなくホルテンシウスまで言うのであった。

「暮らしましょう」

「是非共」

「さあ、だからだ」

「軍曹も言ってくれるし」

「何ならわしも一緒にいよう」

彼はここでこんなことを彼女に言ってきた。

「わしもな。それならいいか」

「軍曹もつていうと」

「マリーの側にいよう。それでいいか」

「軍曹が来てくれるのなら」

幼い時から一緒にいてくれている。その彼が共なら。ここでマリも遂に心が動いたのであった。

「わかったわ。じゃあそういうことだね」

「よかったわ」

それを聞いて心から喜ぶ夫人とホルテンシウスであった。

「それじゃあ今すぐに」

「戻りましょう」

二人は早速城にマリーを連れて行くこととする。しかしここで、であつた。

「やあ只今」

「お待たせしました」

兵達も戻つて来た。トニオも一緒である。彼等の姿を認めてそれまで仕事をしていた村人達も戻つて来たのであつた。忽ちのうちに皆戻つて来た。

「ではまた飲みましょう」

「今度はわし等が」

村人達がビールを差し出す。皆それを飲みだす。その中で兵達がマリーに対して言うのであつた。

「マリー、喜べ」

「いいことがあつたぞ」

「いいこと？」

「そうさ、

「実はトニオがだ」

彼等はトニオをマリーの前に出して言うのであつた。

「今我が連隊への参加が正式に認められたんだ」

「もつとも家族へ届出が必要だからそれをしないとイケないけれども」

「そうなんだ」



「それでもだよ」

だがトニオはそれでも満面の笑顔でマリーに話す。

「僕は今とても幸せなんだ」

「幸せ？」

「友よ、戦友達よ」

兵士達を見回しての言葉である。

「何と楽しい日なんだ、今日は」

「入隊できたからだな」

「マリーと一緒にいられるから」

「マリーといつも一緒にいられるというだけで」

まさに天に昇りそうな顔になっているのであった。

「もうそれだけで充分だよ」

「それじゃあ我々も君に協力しよう」

「君は我々の弟だ。つまり」

兵士達もにこりと笑ってトニオに話す。

「マリーと一緒になれるぞ」

「いつもな」

「そう、いつもだ」

トニオは彼等の言葉を受けてさらに上機嫌になる。

「いつも一緒なんだ、マリーと」

「あの、トニオ」

その有頂天になっていると言ってもいいトニオにマリーは申し訳なさそうに言おうとした。

## 第一幕その十一

「それでだけれど」

「何だい？」

「あのね」

「いや、マリー」

しかしここでシエルピスが出て来たのだった。

「言わなくていい」

「けれど」

「わしが言おう」

こう言って彼女の前に出るのであった。

「御前では言いだろうからな」

「軍曹、けれど」

「いいのだ。それではだ」

マリーの前に出たうえでトニオに向かい合う。そうして彼に対して話すのであった。

「トニオ、君にとっては真に申し訳ないことだが」

「何かあったんですか？入隊はできましたけれど」

「そう、君は入隊することができた」

シエルピスはそれは確かだと話した。

「しかしマリーは」

「マリーは？」

「去らなくてはならなくなったのだ」

「えっ、去るっていうと！？」

そう言われてまず声をあげたのはトニオだった。

「それは一体」

「だよな」

「どういうことなんだ？」

彼だけでなく他の兵士達もそれぞれ顔を見合わせて怪訝な顔にな

った。

「マリーが去るって」

「何処をだろう」

「この連隊をだ」

シエルピスが今度言ったことはトニオだけでなく連隊全体に衝撃を走らせるものだった。

「去ることになった」

「えっ!？」

「そんな」

「嘘だろう!？」

「わしが嘘を言ったことがあるか？」

シエルピスは驚くトニオ達に対して重厚な声で告げた。

「なかったな、それは」

「確かにそうだが」

「しかし」

「マリーの伯母さんが見つかったのだ」

「はじめまして」

ここで侯爵夫人が出て来て皆に対して頭を下げた。

「マリーの伯母でベルケンフィールドといいます」

「侯爵夫人であられる」

「侯爵夫人っていうと」

「貴族か」

「そういうことだ」

またトニオ達に対して告げるシエルピスだった。彼等はまだ驚きを隠せない様子でまさに鳩が豆鉄砲を受けたような顔になってしまっている。

「これでわかったな」

「頭ではわかったが」

「それでも」

彼等にとって急にとんでもないことを言われたので納得はできな

かった。それでまだ驚いた顔でそれぞれ顔を見合わせてそのうえで言い合っていた。

「こんなことになるなんて」

「それも急に」

「御免なさい」

マリーは心から申し訳なさそうに皆に頭を下げた。

「私はこれで」

「マリー……」

「トニオ」

とりわけトニオに対してはであった。

「貴方には本当に悪いけれど」

「それなら僕が入隊したことは」

「まあ待つのだ」

嘆こうとする彼に対してシエルピスが声をかけた。

「入隊したならばそう簡単に抜け出すことはできないがだ」

「そうですね」

そのことはトニオもわかっていて。軍隊という場所は生半可なものではない。それは彼もよくわかっていることであつたのである。

「それは」

「しかしだ」

トニオは項垂れる彼にさらに告げた。

「希望はあるぞ」

「あるんですか」

「君が武勲を挙げてそれをマリーの前に差し出せばだ」

「それで一緒になれるんですね」

「そうだ。マリーが貴族の御令嬢になったとしてもだ」

それでもだというのである。武勲を挙げればだ。

「都合のいいことに今我が軍は忙しい」

「戦争で、ですね」

「オーストリアにプロイセンにロシアにイギリスだ」

ほぼ欧州中を相手に戦争していたのである。革命が起こった直後のフランスは。そしてその中からナポレオンという男も出て来るのである。

「武勲を挙げるべき相手は幾らでもいるぞ」

「それじゃあ僕は」

「頑張るのだ」

こう言つて彼を励ましたのであった。

「わかったな」

「はい、やってみせます」

入隊して早々意気込むことになった。

「そして隊長になります」

「將軍にもなれるぞ」

この時のフランス軍はそうであつた。武勲を挙げれば將軍になれたのである。実際にナポレオンもしがない砲兵将校から瞬く間に將軍になつてゐる。

「わかったな」

「よくわかりました」

「じゃあ皆」

ここでマリーが涙を流しながら皆に告げる。

「さようなら」

「さようなら、マリー」

「元気だな」

兵士達も別れを惜しむ顔で彼女に告げる。

「また会おうな」

「その時にまた飲もう」

「ええ、心ゆくまで」

「じゃあマリー」

侯爵夫人が彼女の横からそつと声をかけてきた。

「帰りましょう、私達のお城へ」

「ええ、伯母様」

伯母の言葉にこくりと頷く。そうして彼女は連隊を後にした。ト  
二才達に涙ながらに見送られながら。

## 第二幕その一

### 第二幕 晴れて大団円

マリーは侯爵夫人の家に迎え入れられた。それから一年経った。今は彼女は奇麗な絹のドレスに身を包んでいる。そして立派な城の中で過ごしている。

その城の客間で。今侯爵夫人は執事の服を着ているシエルピスと話をしていた。彼は軍人から今ではマリーの側にいる執事になったのである。

「ねえシエルピスさん」

「何でしょうか」

立派な居間である。椅子もシャングリアも豪華なもので奇麗に掃除までされている。中国の青と白の壺もあれば日本の漆器も飾られている。何処か異国情緒のある部屋でしかも黒く大きなピアノまである。

その部屋の中で侯爵夫人は。今はシエルピスに対して声をかけているのである。 8

「御願いがあるのだけれど」

「御願いですか」

「ええ、マリーのことだね」

その姪のことであつた。

「あの娘ももう年頃じゃない」

「それはその通りです」

執事の服を着ていても顔は黴しいままである。青い軍服から黒い執事の服に変わったただけにしか見えないのは気のせいではない。姿勢も仕草もそのままだからだ。

「お嬢様も。もう」

「だからね」

このことを話してからまた言う侯爵夫人であつた。

「貴方からも言って欲しいのよ。結婚のことをね」

「お嬢様の御結婚をですか」

「相手はもういるのよ」

それはいるといふのである。

「クラーケントルプ公爵家の次男さんで」

「クラーケントルプ公爵のですか」

「あの家なら問題はないわ」

侯爵夫人はこうも話すのであった。

「家柄もいいし資産もあるし」

「そうですね。そうした意味では」

「だからどうかって考えてるのよ」

ここまで話したうえであらためてシエルピスに問うのであった。

「あの娘につて」

「お嬢様がどう仰るかですが」

「マリーはまだ忘れていないみたいだけれど」

ここで暗い顔になる侯爵夫人だった。

「軍隊のことを」

「それはそうですね」

それも当然だと述べるシエルピスだった。

「何しろ赤子の頃からおられましたし」

「貴方も一緒だったわね」

「はい」

実は彼はマリーのたつての願いでこの家に入ったのである。せめて連隊にいた誰かがいつも側にいて欲しいという彼女の願いを受けてである。

「その通りです」

「その貴方から言って欲しいのよ」

彼の顔を見上げて頼み込むのだった。その眉が少し歪んでいた。

「そうかね」

「そうは言ってもです」



しかしシエルピスは彼女の頼みに今一つ乗らない様子であった。

「お嬢様が何と仰るか」

「だから貴方に言っているのだけれど」

話は堂々巡りになろうとしていた。シエルピスはそれを密かに狙っていた。しかしここでそのマリーが部屋にやって来たのであった。侯爵夫人はシエルピスとの話を止めて彼女に顔を向けるのだった。

今マリーは黄色く美しい絹のドレスに身を包み髪を後ろに長く伸ばしていた。

「マリー、来たわね」

「はい、伯母様」

恭しく一礼する。しかし咄嗟に敬礼しそうになってそれを止めた一礼であった。

「御機嫌うるわしゅう」

「堅苦しいことはいいわ」

姪に対して穏やかに微笑んでの言葉だった。

「今はね」

「そうですか」

「堅苦しいことをしなくてはいけない時もあるけれど」

こんなことも言うのであった。

「今はそうではないのだから」

「有り難うございます」

「それよりもよ」

優しい笑顔でさらに姪に告げる。

「歌のレッスンは始めるわよ」

「歌ですか」

「モーツァルトよ」

侯爵夫人のお気に入りの作曲家であった。

## 第二幕その二

「それでいいわね」

「はい、それじゃあ」

「まずはフィガロの結婚から」

モーツァルトのあまりにも有名なオペラの一つである。この作品はこの時代から話題になっていたのである。

「楽しかった思い出は何処に。これにしましょう」

「その曲なのですか？」

「そうだけれど嫌なの？」

「モーツァルトでしたら」

マリーは少し怪訝な顔になって伯母に対して言うのであった。

「皆で歌う曲が」

「貴女のレッスンなのよ」

ピアノの席に座った侯爵夫人は咎める目で姪に告げた。

「それでどうして重唱を歌うの？」

「だって私」

ここでマリーは声を少し小さくさせ眉を顰めさせて伯母に言葉を返した。

「そっちの方が好きだから」

「貴女の好き嫌いは問題ではないの」

ぴしゃりと言い切る侯爵夫人だった。

「これは歌のレッスンなのよ」

「レッスンだからなのね」

「そうよ。それは問題ではないの」

マリーにこう告げるのであった。

「いいわね」

「それじゃあ」

「はじめるわよ」

ここでピアノの演奏をはじめた。しかしここでマリーが歌った曲は。

「うっ、我が部隊よ」

連隊の歌であつた。

「我が愛すべき部隊よ」

「我が第二十一連隊よ」

シエルピスもここで歌いはじめたのであつた。マリーと共に。

「今ここに立ち上がり」

「祖国の敵を倒そう」

「我等の手にするのは勝利のみ」

「栄光が我等を待っている」

二人調子を合わせて歌う。それは実に息が合っている。

「さあ、今こそ銃を手にし」

「敵に立ち向かい」

「止めなさい」

二人が歌うのを演奏を中止して咎める夫人だつた。

「モーツァルトなのにどうしてその歌になるの」

「それは」

「いや、申し訳ありません」

シエルピスがマリーの前にすつと出て侯爵夫人に謝罪する。

「つつい」

「つついではありません」

マリーを庇うシエルピスに対して言う侯爵夫人であつた。

「全く。そんなことではすね」

「すいません、伯母様」

「わかればいいですけど。まあいいわ」

ここで怒るのを止めた。それで再び演奏をはじめたのだつた。

「いくわよ」

「はい」

またモーツァルトであつた。しかしマリーが歌う曲はまた。

「さあ行こう我等の目指す勝利に」

「今ここで我等は敵を打ち破り」

「祖国の危機を救うのだ」

また軍関係の歌であつた。

「フランスの栄光と未来は我等が担い」

「そして旗が翻る」

「ええ、あの麗しき旗よ」

二人に乗せられて侯爵夫人も演奏しながら歌いはじめた。

「今こそあの旗が翻る時」

「自由、平等、そして博愛」

「我等は永遠にこの三つと共にある」

「だからですね」

自分も加わってしまったことに気付いてまた演奏を止めた侯爵夫人であつた。

「モーツァルトを。もういいわ」

「宜しいのですか？」

「レッスンにならないわ」

こう言つてピアノを収めて席を立つ夫人であつた。

## 第二幕その三

「だからいいわ。それよりもね」

「それよりも？」

「お菓子を持って来るから」

自分から持つて来るというのである。

「皆で食べましょう。ホルテンシウスさんも呼んでね」

「メイドさん達も」

「そうよ。皆で食べましょう」

こう言うのである。

「丁度三時だしね」

「ええ。じゃあ」

「お菓子はチヨコレートがいいかしら」

早速何を食べようかと考えはじめる侯爵夫人だった。部屋を出る扉に向かいながら顔を上げて顎に右手の人差し指をやって述べる。

「それと。コーヒーね」

「奥様」

シエルピスがその彼女のところにやって来て言う。

「では私もお手伝いを」

「ええ、御願いますわ」

「はい、それでは」

こうして二人で部屋を出る。部屋にはマリーだけが残った。一人になったマリーは窓の外を物憂げな顔で言うのであった。

「高い身分に贅沢な暮らし」

今の彼女の境遇である。

「それが何だというの？そんなものがあっても」

その顔で呟き続ける。

「何にもならないわ。ここには皆はいない」

連隊の皆である。

「軍曹はいてくれるけれど皆はいない。あの懐かしい行進曲も聴こえない」

軍に付き物のそれである。これなくして軍ではないと言っても過言ではない。

「そして朝のラッパも。点呼の大砲や笛の声もなければ勇ましい掛け声もない」

全てが彼女にとってかけがえないものになっていたのだ。

「勝利を祝う宴もなければ馬達もない。それに」

ここで彼のことを思い出したのである。

「トニオもないわ。何もないのよ、ここには」

嘆きは深まるばかりであった。しかしその嘆きは突如として切り裂かれそのうえで瞬く間に投げ捨てられることになったのであった。突如として城の周りに。マリーが望んでいたあの曲が聴こえてきたのだ。

「あの曲は」

「さあ進もう諸君」

「勝利に向かって」

行進曲であった。そしてその曲に合わせて歌声も聴こえてきた。

「今こそ我等が突撃し」

「勝利を手にするのだ」

「進め、フランスの兵士達」

「栄光が君達を待っているぞ」

「間違いないわ」

ここでまで聞いて確信したマリーであった。

「あの歌は。それにあの歌声は」

彼女がその行進曲と歌声に戸惑っているとだった。部屋の中に懐かしい彼等が雪崩れ込んで来たのであった。

「やあマリー」

「久しぶりだね」

彼等であった。兵士達は瞬く間にマリーの周りに集ったのであつ

た。

「元氣だったかい？」

「見たところあまりそうじゃないみたいだけれど」

「いえ、今元氣になったわ」

しかしマリーは笑顔で彼等にこう返した。

「皆の顔を見られたから」

「そうか、それは何よりだ」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

「全くだ」

兵士達は彼女のこの言葉を聞いて満面の笑顔になった。そして一斉に後ろを向いて恭しく言うのであった。

「では隊長」

「こちらに」

「うん」

ここで一人の若者が出て来た。見れば士官の服である。その彼は。

## 第二幕その四

「トニオ……」

「久し振りだねマリー」

トニオであつた。彼はにこりと笑つてマリーに言つてきたのであつた。

「元気そうで何よりだよ」

「貴方、まさか」

「そうだよ。あれから頑張つてね」

トニオはその笑顔のままマリーに話していく。 62

「こうして隊長になつたんだ」

「まだ一年なのに」

「一年だけれど武勲を挙げ続けてね」

その結果だというのである。

「それで今はね」

「そうだったの」

「お嬢様」

二人が話をしているとホルテンシウスが部屋に入つて来た。

「奥様は……えっ!？」

彼は兵士達を見て。まずは飛び上がらんばかりに驚いた。その目を大きく見開かせて。

「何で兵隊さん達がお城に!？」

「やあ、貴方ともお久し振りです」

「お元気そうで何よりです」

兵士達は驚く彼に対して気さくに述べた。

「お変わりもないようで」

「真に有り難いことです」

「再会はいいのですが」

「まあまあ」



「それですね」

兵士達にはこやかに笑いながら彼の周りに集まって来た。そうしてその肉付きのいい背中に手を回してそのうえで誘うのであった。

「あちらで飲みましょう」

「ワインがあるのですよ」

「お酒ですか」

「ええ。ソーセージもありますよ」

「それで一杯」

「それなら」

ホルテンシウスはそのワインとソーセージに誘われて兵士達と共に部屋を後にした。部屋に残ったのはマリーとトニオだけだった。二人は熱い目で見詰め合う。

「まさかこんな形で再会できるなんて」

「君に会う為に来たんだ」

じつと自分を見詰めるマリーに対しての言葉である。

「その為に戦って。ここまでね」

「そうだったの。私の為に」

「それでマリー」

彼もまた熱い目でマリーを見て言うのであった。

「僕は君を」

「迎えに来てくれたのね」

「そうだよ。君の為にここまでね」

こう話しているとであった。今度はシエルピスが部屋の中に入ってきた。その手にはコーヒーポットがある。だがそのコーヒーポットを手に立ち止まることになってしまった。

そのトニオを見て。びっくりした顔で言うのであった。

「まさかと思うがもうなのか」

「はい、戦ってその武勲で」

「隊長になってそのうえ」

「マリーを迎えに来ました」

シエルピスに対しては誇らしげな顔で述べるのであった。

「こうして」

「凄いものだ」

その彼を見て首を横にゆっくりと振りながら感歎の言葉を漏らした。

「僅か一年で、とはな」

「マリーは僕にとって女神だよ」

トニオは満面の笑顔のままであった。

「それで僕を隊長にしてくれたんだ」

「私がなの」

「そうさ。僕が隊長になれたのもマリーに会いたいからだからだというのである。

「マリーを迎えたいからだったからなんだ」

「それで一年で隊長に」

「だから言えるよ」

マリーをじっと見詰めての言葉だった。

「僕は君が好きだ。そして」

「そして？」

「結婚しよう」

プロポーズだった。

「僕とね」

「ええ、私も」

マリーに異存がある筈がなかった。

「私もよ。二人一緒にね」

「ずっといよう」

「そう。また三人が巡り合えた」

シエルピスもここで言ってきた。

「だからもう三人は離れないでおこう」

「軍曹も一緒にいてくれるのね」

「そうさ」

優しい笑みでマリーに告げる。

## 第二幕その五

「ずっと一緒にいよう、わしは執事として」

「私の兄として」

彼はそれだというのである。

「ずっと一緒に」

「そしてトニオは」

「君の夫として」

トニオ自身の言葉である。

「ずっと一緒にいるよ。それでいいね」

「ええ、私も」

三人は今笑顔で話をしていた。しかしここで侯爵夫人が部屋に戻って来たのであった。

「チヨコレートはたっぷりあるわ。皆で……えっ!？」

「伯母様」

マリーが兵隊姿のトニオを見て驚く侯爵夫人に対して述べた。

「私はこの人と結婚することにしました」

「貴方は確か」

そのトニオを見てさらに驚く侯爵夫人だった。

「あの時のチロルの」

「はい、隊長になりました」

侯爵夫人に対して胸を張って述べるのだった。

「マリーを迎える為に」

「いえ、駄目よ」

そう言われてもすぐに顔を顰めたうえで言葉を返す侯爵夫人だった。

「それはできないわよ」

「それはどうしてなの?」

「そうです、それは何故」

「だってこの娘は」

マリーとトニオに対して答えるのだった。

「婚約したのだから」

「えっ!？」

「嘘だ、そんな筈は」

「嘘ではありません」

侯爵夫人は強い声で言った。

「ですから貴方との結婚はできません」

「そんな筈がない」

トニオはその言葉を信じようとはしなかった。

「僕は。その為に今までやってきたのに」

「それでもです」

侯爵夫人はさらに言った。

「マリーは貴方とは結婚できません」

「そんな、私は嫌よ」

マリー自身は顔を顰めさせて言葉を返した。

「私はトニオと」

「駄目よ、何があっても」

侯爵夫人の言葉は厳しいものであった。

「貴女は私の決めた相手と結婚するのだから」

「くっ・・・・・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

トニオもマリーも歯噛みするしかなかった。侯爵夫人はそんな二人をよそに今度はシェルピスに対して声をかけるのであった。

「それでですけど」

「何でしょうか」

「こちらへ」

こう言って彼を部屋の外に連れていく。そうしてその扉の向こうで二人で話をするのだった。

「実はね」

「実は？」

「マリーは私の娘なのよ」

このことを話すのだった。

「実はね」

「そうだったのですか」

シエルピスも今の告白には僅かだが驚きの顔を見せた。

「マリーは貴女の」

「今まで内緒にしていたけれど実は」

「そうでしたか。あの娘は」

「それでだけれど」

背の高いシエルピスを見上げて懇願する顔での言葉だった。

「あの娘を説得して」

「その結婚をですか」

「そうよ。結婚するのよ」

「こう話すのである。」

「クラーケントルプ公爵家の次男さんとね」

「私はです」

彼女の言葉を受けてから話すシエルピスだった。

## 第二幕その六

「あの娘の幸せこそが最も大事だと考えています」

「それじゃあ」

「約束しましょう」

彼はここで断言した。

「あの娘を必ず幸せにいます」

「そうしてくれるのね」

「ええ、必ず」

確かに頷いた。それは確かであった。

「そうしてみせるわ」

「そう。それだったら」

「お任せ下さい」

また言うシエルピスだった。

「このことに対して」

「じゃあこれを」

ここで結婚証書を出す侯爵夫人だった。

「これをあの娘に」

「サインをさせるのですね」

「そうすればあの娘を幸せにできるわ」

彼女は言った。

「その為にも」

「では今からマリーのところに」

「行きましょう」

こう話してから部屋に戻る二人だった。そこんはマリーとトニオがまだいた。侯爵夫人はその二人に対して言うのであった。

「私は貴女の為に来たのよ」

「わしもだ」

シエルピスも言うのだった。

「貴女の幸せの為に」

「丁度ここに」

ここで部屋の中に青く着飾った服を着た妙齡の美女とその後ろに高貴な身なりの人達が集まって来ていた。彼等はマリーを見て口々に言った。

「奥様、今日はどうも」

「私の息子との婚礼の話ですが」

その妙齡の美女が彼等を代表して侯爵夫人の前で恭しく一礼した。

「その相手は」

「はい、それはです」

侯爵夫人はここでマリーを指し示すのだった。

「この娘です。私の姪です」

「あら、この娘は」

その妙齡の美女はここにこやかに言うのだった。

「私の息子の嫁に相応しいわ」

「そう思われますわ」

「ええ、そう思うでしょう」

にこやかに笑っての言葉であった。

「本当に」

「奥様」

侯爵夫人もにこやかに彼に返す。

「ではここで」

「はい、これを」

侯爵夫人はその美女に恭しく結婚証明書を差し出そうとする。しかしここで。

何と兵士達が雪崩れ込んできたのであった。そうして瞬く間にマリーとトニオを護る様にして取り囲んでしまったのだった。あつという間であつた。

「悪いけれどな」

「マリーは渡さないからな」



「あんた達にはな」

彼等は口々にこう言うのだった。

「安心してくれ、マリ」

「ここは俺達に任せてくれ」

「どうか」

「皆……」

「隊長ですよ」

彼等はマリだけでなく皆に対しても話すのだった。

「ここは任せて下さい」

「どうか」

「僕もだ」

トニオはマリを己の後ろにやって言った。

「僕もマリと結婚する、絶対にだ」

「絶対に？」

「そうだ、絶対に」

彼は話した。

## 第二幕その七

「何があっても」

「ト二才……」

「君は誰にも渡さない」

彼はマリーを己の後ろに護りながら話した。

「絶対に」

「そう。じゃあ私も」

マリーも言うのだった。ト二才の本当の心を知って。

「私もト二才と、皆と離れたくないわ」

「僕と」

「俺達とも」

「私は生まれてからずっと皆と一緒にいたから」

まずはこのことを言うのだった。

「第二十一連隊にいて皆に育ててもらって」

「皆と」

「じゃあこの人達は」

客達はその彼女の言葉を聞いて言った。

「この娘にとつては」

「まさに家族なのか」

「はい、そうです」

今度は客達に答えるマリーだった。

「皆私の家族です。かけがえのない家族です」

「それなら貴女は」

「誰と結婚するのですか？」

「この人とです」

ト二才を抱き締めての言葉だった。

「私はこの人とだけ結ばれます」

「その隊長さんと」

「一緒にですか」

「そうです。一緒にです」  
また言うマリーだった。

「この人だけです」

「そうだったのか」

「その人と」

「奥様」

ここでシエルピスが侯爵夫人に顔を向けて声をかけた。

「どうされますか」

「貴方は言いましたね」

侯爵夫人も彼に顔を向けて言った。

「貴方はあの娘の幸せを望んでいると」

「その通りです」

「それじゃあやっぱり」

「私は確かに今は執事です」

こうは言う。しかしその足をマリー達のところに向けて。そのう  
えで言うのだった。

「ですがこの連隊にいました。マリーと共にです」

「では貴方も」

「マリーの幸せはここにあります」

マリーの側に來ての言葉だ。

「ですから私は」

「そうなの。貴方も」

「そして奥様」

シエルピスは侯爵夫人に対しても告げてきた。

「奥様もわかっておられる筈です」

「私も」

「そうです。わかっておられますね」

こう彼女に言うのであった。

「ですから」

「私は」

「さあ、どうされますか？」

あらためて侯爵夫人に問う。

「貴女は」

「私は」

「マリーの幸福を。どうされますか」

「・・・・・・・・・・」

シエルピスの問いにまずは俯いて沈黙した侯爵夫人だった。しかし今遂に。顔をあげて言うのだった。

## 第二幕その八

「私は」

「どうされますか？」

「私も言いますよ」

その顔をあげての言葉であつた。

「マリー」

「はい」

「貴女は私の姪ではありません」

彼女に顔を向けてさらに言つのだつた。

「貴女は私の娘です」

「えっ、そんな」

「これは本当のことです。妹は既にバイエルンの方に嫁いで二十年になります」

このことも話すのであつた。

「そして大尉と恋仲になつたのは私だつたのです」

「そうだつたのですか」

これにはシエルピスも驚きを隠せなかつた。

「貴女がだつたのですか」

「大尉が戦場に向かつた時に乳母である召使もこの娘と共に行かせたのです」

そこで大尉は戦死し乳母も戦火に巻き込まれ死んだのである。

「ですから。貴女は」

「何てこと……」

「そんなことが」

これには皆啞然とした。マリーだけでなくトニオにシエルピスも兵士達もそうであつたしそれは客達も同じだつた。皆一様に啞然としてしまつていた。

「そしてです」

「そして？」

「マリー、貴女の心もわかりました」  
娘に対する言葉である。

「貴女は一緒になるべきです」

「一緒に？」

「そう、その方と」

トニオに顔を向けての言葉であつた。

「一緒になりなさい。是非」

「宜しいのですか？」

「奥様には申し訳ありませんが」

ここでその美女、即ち公爵夫人に顔を向けて言うのであつた。

「娘はこの隊長殿と結婚することになりました」

「左様ですか」

公爵夫人は意外にも彼女の言葉をありのまま受けたのであつた。

「それではそうされると宜しいでしょう」

「御許し願えますか」

「御心を見せてもらつてはそう言うしかありません」

公爵夫人の今の言葉は優しい笑みと共の言葉だつた。

「ですから」

「有り難うございます」

「ではマリー」

「ええ」

ここでマリーはトニオの言葉に応えて彼にそつと寄り添う。

「これから一緒に」

「そう。一緒だよ」

二人はこう言い合いながら手を取り合つた。

「一緒にいよう。ずっとね」

「神の御前まで」

「では皆」

シエルピスがそんな二人をこの上なく温かい目で見ながら一同に

告げてきた。

「祝おう、この幸せな二人を祝おう」

「ええ、それでは」

「是非」

兵士達がそれぞれワインを出してきた。それと共に杯も。

その二つが部屋の中にいる一同の手に運ばれて。そうしてそのう  
えでシェルピスが温度を取って高らかに叫ぶのであった。

「乾杯！」

「乾杯！」

「二人のこれからの永遠の幸福を祝って！」

「乾杯！」

皆で祝いの声を捧げ合う。その主役の二人のところに侯爵夫人が  
来て。そうして彼等を抱き寄せて言うのであった。

「御免なさい、今まで」

「お母様……」

「それに今も貴女に無理な結婚を強いて」

「いいのよ、それは」

こう言つてその母を許すマリーだった。

「だつてお母様もお母様として私の幸福を考えてくれたのよね」

「それは」

「だから。いいのよ」

これがマリーの言葉だった。

「それでね」

「有り難う……」

侯爵夫人はその二つの目から熱いものを流して娘に応えた。

「そう言つてくれて」

「これからは」

マリーが侯爵夫人に告げてきた。

「お母様と呼んでもいいのよね」

「ええ、どうか呼んで」

こう娘に言葉を返した。

「そしてその人とずっと幸せにね」

「ええ、ずっと」

最後にトニオの顔を見る。トニオはその彼女に対して優しい微笑で返す。今二人は心からその幸せと愛を感じているのであった。

連隊の娘

完

2009・9・27



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2565m/>

---

連隊の娘

2011年4月28日00時58分発行